中学時代の海外研修体験が持つその後の人生へのインパクト

平井 華代
（岩手大学）
阿部 恵
（八戸工業高等専門学校）
尾中 夏美
（岩手大学）

〈キーワード:中学生／海外研修／インパクト／修正版グラウンデッド･セオリー･アプローチ〉

1．背景と先行研究

1．1．海外研修が持つインパクト

大学教育のグローバル化が推進される中（グローバル人材育成推進会議 2011、日本学生支援機構 2019）、海外研修の持つインパクトについて研究蓄積がなされつつある。これらから、留学経験は、大学生の異文化間能力や外国語運用能力の向上に有益に働き、成績や卒業率、学習意欲の向上、専門分野の知識や技術の習得といった学業面において有益なインパクトを与え、社交性の向上や人としての成長に肯定的な影響を与えることが明らかになっている（新見 2018）。

高校留学が与えるインパクトについては、研究蓄積は未だ限定的ではあるものの、横田、太田、新見（2018）が、高校留学の方が大学留学よりも、学生の語学力や専門性、コミュニケーション能力、積極性・行動力、目標を達成する力、ストレス耐性、リーダーシップ、異文化に対応する力等、生徒の能力を向上させることを示した。

1．2．海外研修が中学生に与えるインパクト

一方で、中学時代の海外研修のインパクトに注目する研究はほとんど行われてこなかった。文部科学省（2005）は、「国際社会を生きる人材を育成するために」、初等中等教育における「すべての子どもたちが、①異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、③自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力を身に付けることができるようにすべき」としており、現在までに多数の市町村や一部の私立中学校を中心に中学生海外派遣事業を展開してきた（例えば門真市 2019、学校法人南山学園 2017、函館市 2014、東住吉区 2019 など）。しかし、これらの報告は、個々のプログラムの実施記録や参加者の感想記にとどまっているうえ、全国規模でのデータは存在しない。海外研修体験が中学生の意識やその後の人生にどのようなインパクトを与えるのかといった視点での研究蓄積は極めて限定的である。

2．研究の目的

筆者らは、海外研修・留学の低年齢化が今後も進むと予想される中、海外研修が中学生の自己成長と意識に与える影響についての調査を行った（平井、阿部、尾中 2016、Hirai, Abe, Onaka 2018）。その結果、帰国直後の中学生に見られた効果に、「新たなチャレンジへの前向きな姿勢の醸成」「自信・積極性の向上」「外国語学習の意欲の向上」「外国や外国人への関心」「海外の事情への全般的関心」を見出した。さらに、約9割の生徒が、今後また海外研修に参加したいと答えた。

海外研修参加直後に見られたこのような意識変化は、中学生のその後の人生にどのような意味を持つであろうか。この問いに答える、中学時代の海外研修体験者の追跡調査を試みた研究は未だない。これは、卒業後の移転や個人情報の保護といった研究遂行上の制約から、追跡調査が困難であることが背景にあると思われる。

そこで本研究では、海外研修帰国直後の中学生に見られた効果（平井、阿部、尾中 2016、Hirai, Abe, Onaka 2018）を踏まえ、中学時代の海外研修体験が、その後の人生にどのような意味を持つのかを明らかにするため、中学時代に海外研

修を経験した大学生と高等専門学校生への聞き取り調査を実施した。振り返りを元に、中学時代の海外研修の人生へのインパクトを検討し、さらに海外研修に参加を思いとどまらせる阻害要因について検討した。これにより、中学生の短期的な海外体験が人材育成にどれだけ有効であるかといった疑問や、市町村主導で財源を投資して実施する意義はどこにあるのかといった批判に対して、学術的な光を当て検討することが可能となる。英語教育が小学校から始まり、今後益々海外研修の低年齢化が進むと予想されるなかで、本研究は、海外研修の意義における議論に、新しい観点を提示することができると考える。

3．研究手法

3．1．データ収集と対象者

筆者らが教育活動を行う東北2県の高等教育機関において、中学時代に市町村が主催した海外研修に参加した経験のある12名の被験者（高等専門学校本科高学年生・専攻科生3名、大学生9名）を対象に半構造化インタビューを行った。平成29年8月から11月、平成30年7月から8月、中学時代の短期海外研修経験の振り返りと参加後の変化を中心に、各約1時間の聞き取りを実施した。高専生は大学生と同年齢の学生とした。海外研修先はアメリカ6名、カナダ2名、中国2名、オーストラリア1名、ブルガリア1名である。各学生の中学時代における海外研修渡航先および現在までの海外研修と国内受け入れ事業参加の経験について図1に表した。

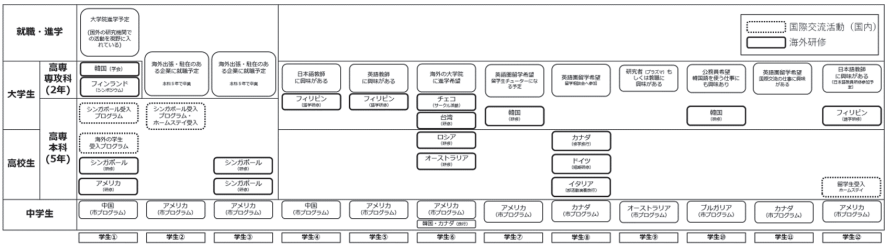


図1　学生の海外派遣・受け入れ事業参加に関わる歩み（筆者ら作成）

３．２．分析方法

被験者の承諾を得てインタビューを録音し、文字化した。中学時代の海外研修により生じた意識変化やその後の行動のプロセスと相互の影響関係の様態を明らかにするためにM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）によるモデルの構築を行った（木下 2003、2007）。M-GTAを分析方法として用いる理由は四つある。第一に、研究者がとりあげた分析テーマの視点に沿って、データに密着して､帰納的に仮説（モデル）を構築することに優れた方法であること、第二に、意識や行動のプロセスを明らかにできること、第三に方法論が体系化されていること、第四に面接データによる質的分析が可能である[1)]ことである。

分析の手順としては、分析ワークシート（木下 2003）に従い、全事例から概念を生成した。概念とは、分析する人間の問題意識や理論的関心に基づき、研究上重要な意味を持つと思われるデータ中の語句や文脈を、その解釈上の意味を説明するラベルに圧縮したものである（木下 2003、2007）。概念が一定数生成された段階で、それらを統廃合し、複数の概念を包括的に説明するカテゴリーを生成した。さらに、そこから各カテゴリー間の関連性や順序性を検討していき、カテゴリー同士の関係性を表すモデルを描いていった。以上のプロセスによって、テキストを分析し結果図（図２）を作成した。

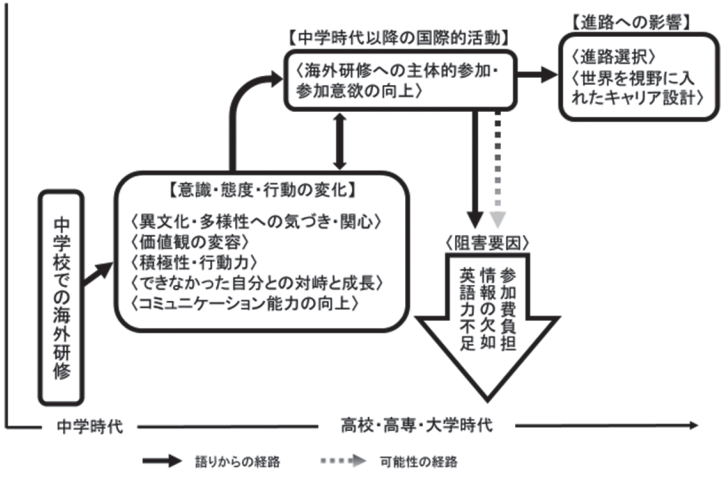


図２　中学時代の海外研修後の意識と行動変化（筆者ら作成）

4．結果と考察

4．1．中学時代の海外研修のインパクト：M-GTA から

図２は、中学時代の海外研修がどのような意識と行動の変化を生んだのかを中心にM-GTAによりテキスト分析した結果図である。カテゴリーは【　】で、概念は〈　〉で、各学生のインタビューからの発言例は「　」で示した。分析の結果、9の概念が生成され、そこから3つのカテゴリーが生成された。

海外研修に参加した後、〈異文化・多様性への気づきと関心〉〈価値観の変容〉〈積極性・行動力〉〈できなかった自分との対峙と成長〉〈コミュニケーション能力の向上〉といった【意識・態度・行動の変化】が生じていた。その結果、【中学時代以降の国際的活動】において、自身の内発的な動機づけによって海外研修に参加したり、国内での国際的な活動に関わったりするなど、〈海外研修への主体的参加・参加意欲の向上〉がみられた。【進路への影響】については、〈進路選択〉において中学時代の海外研修が影響を及ぼしている例や、海外の研究所における研究職、日本語教師、海外駐在員など、〈世界を視野に入れたキャリア設計〉を志向する傾向が見られた。これは海外研修によって生じた中学生の意識変化は、必ずしも一過性のものではなく、その後も継続的な行動変化を促しうることを示している。その一方で、海外研修に関心を持ちながらも、参加を阻害する〈阻害要因〉として、参加費負担、情報の欠如、英語力不足があることが示された。以下、概念ごとに説明を行う。

4．2．意識・態度・行動の変化

〈異文化・多様性への気づきと関心〉

〈異文化・多様性への気づきと関心〉を、「これまで出会ったことのない多様性の気づきと新鮮な驚き、未知なる経験を面白いと感じる態度」と定義した。学生⑥以外の11名の学生にとり、中学校の海外研修が初めての海外体験であり、文化や価値観の多様性を目にした際の新鮮な驚きが語られた。「文化、言葉、何から何まで違うのがすごい新鮮で、それが非常に楽しい、知ることができるのが楽しい。（学生②）」といった発言の他、「ホストファミリーの家に靴のまま（学生⑫）」入った驚きなど、身近な生活を通した異文化と多様性とを体感する場となってい

た。

〈価値観の変容〉

異文化への驚きや関心は、学生の価値観をもゆさぶるものであった。〈価値観の変容〉を「身近な常識を客観視する視点を持ち、視野が広がり、価値観がゆさぶられること」と定義した。中国に派遣された学生④は、「実際に見てみないと分からないことってある」と語り、知らずに形成されていた訪問国のイメージの払しょくと、メディア等からの情報を客観視する経験をした。また、アメリカに派遣された学生⑤と⑫は、私服通学や活発なディスカッションなど、日本と異なる教室の雰囲気を例に挙げて、価値観の違いを感じ取った。同様に、カナダに派遣された学生⑧は、「型にはめられていた」自分や日本社会への気づきを通して、「自由の意味」を考え、自分の存在する社会と自分自身を客観的に見る視座を得たと語った。

〈積極性・行動力〉

海外研修参加後にみられた〈積極性や行動力〉を、「怖気づくことなく立ち向かっていく性質と様々な面において外部との接触を頻繁に行う力」と定義した。学生⑨は「それまでより､生徒会の運営でも意見を言えるようになった」と語り、学生②は海外研修後､「自分から始めよう、行動起こそう」という気持ちが強くなり､「まず人の輪に自分から入り、自分で人の輪を作ってみよう」と考えるようになったと語った。同様に学生⑦は､「自分の思いを伝えたいという強い気持ちが芽生え」､「言わなかったら何にも伝わらないということに気づいたので、これが外国人と交流する上で一番気をつけていることとなりました」と語った。

高校時代に教室で海外研修派遣プログラムが紹介された際に､「真っ先に手をあげ」て、ロシアやオーストラリア研修、大学では台湾研修に参加した経験を持つ学生⑥は､「国際交流楽しいな、海外に行くのは楽しいな」と思うようになったきっかけが､「中学校時代にアメリカ（研修）に行ったこと」と語った。同様に、学生⑤も、初めての海外研修で自分の世界や知識の狭さに気づき、将来さらに海外に行くことを強く希望するようになったと述べ、海外に関わるチャンスを自らつかもうとする行動力が向上していることが示された。

〈できなかった自分との対峙と成長〉

英語での会話が「楽しい」こととして経験される一方で、多くが自分の英語力の限界や思うように言いたいことが伝えられない悔しさと情けなさを経験していた。〈できなかった自分との対峙と成長〉は、「心理的、技能的限界のためにコミュニケーションが思うようにできない自分への苛立ちと悔しさへの反省から、英語を使う機会へ積極的にアプローチしようとすること」と定義した。自分の得意な日本の伝統文化を披露した時に英語力不足で十分な対応ができなかった後悔が今も残るという学生⑥、得意なはずの英語が会話に使えず帰国後学習態度が向上した学生⑦、ホストファミリーとの意思疎通に悔いが残りリベンジを誓う学生⑪にみられるように、英語で思うような意思疎通ができなかった悔しさや不甲斐なさに向き合う経験は、英語学習意欲を養う契機となっていた。

〈コミュニケーション能力の向上〉

ここでは〈コミュニケーション能力の向上〉を、「“正しい英語”を使わなければならないという呪縛からの解放と、言語のみならず非言語ツールも積極的に活用しようとする姿勢」と定義した。「ちゃんとした英語をしゃべらなきゃ」という固定観念にとらわれて、ホームステイ先の家族と打ち解けられずにいたという学生⑤は、「ほんとうに簡単な英語」を通じた交流が「すごく楽しくて、それから家族とも打ち解けられるようになった」経験を振り返り、「簡単な英語でもコミュニケーションを取れればいいんだと思うようになった」と述べた。同様に、「簡単な英語や身振り手振り」を使ってよいと引率教員にアドバイスされた学生②は、「（身振り手振りで）コミュニケーションが成り立って、会話が弾んでくるようになって。その時です、コミュニケーションが楽しいなって思ったのは」と非言語ツールを交えてコミュニケーションができるようになった体験を振り返った。より複雑な会話や意見交換を英語でできるようになりたいと感じた学生⑧は、英文法の意義に気づき、「基礎を固めようと」勉強をしはじめた。同様に、学生⑥は、「人に納得してもらえるように話す力を付けなきゃ」と考え、高校時代に2回、大学時代にこれまで2回海外研修に参加し、英会話力の向上に励んでいた。

４．３．中学時代以降の国際的活動

〈海外研修への主体的参加・参加意欲の向上〉

被験者12名のうち、その後高校時代（高専１～３年次を含む）に４名、大学時代（高専４年～専攻科２年を含む）に８名が海外研修に参加していた（図１）。参加に至っていない学生も、参加に向けて海外研修に関する情報収集をしていたり（学生⑪）、国内での留学生受け入れプログラムや国際関連イベントに参加したり（学生②）しており、積極的な行動を起こしていることがわかった。「アメリカ（中学時代に参加した海外研修）が面白かったんで、海外にもっと行きたい」と高専入学後にシンガポール研修に二度参加した学生③や、中学時代のアメリカ体験がなかったら、高校時代のロシア研修とオーストラリア研修には参加していなかっただろうという学生⑥の発言に見られるように、中学時代の海外研修の体験は、その後の海外研修への参加や意欲向上といった、国際的な活動への主体的な参加につながっていることが示された。

４．４．進路への影響

〈進路選択〉

中学時代の海外研修は、大学の〈進路選択〉においても影響を及ぼしうることが示唆された。中学時代の海外研修で、英語を話せずに悔しい思いをし、その後意欲的に英語学習に取り組んでいる学生⑪は、「英語に関われるようなところに入りたいと思いました。…留学や研修がたくさんあるって聞いたので」現在の大学に進学を決めた。また、学生⑨は、「（中学時代の海外研修を経験していなかったら）グローバル人材育成のための先端理系コースへ応募」はしなかっただろうと語り、中学時代の海外研修体験が大学進学時のコース選択に影響を及ぼしたことを語った。その他の学生についても、充実した海外研修や留学の機会提供が行われている大学であるかを、進学先決定の判断基準の一つにしていたことが語られた（学生⑥、⑩、⑫）。

〈世界を視野に入れたキャリア設計〉

中学時代の海外研修体験を通して得られた【意識・態度・行動の変化】は、その後の海外研修や国際交流活動への主体的参加につながり、さらには海外を視野

に入れたキャリア設計につながることが示唆された。「将来は、国内だけに留まらず、国外の研究機関にも視野に入れて活動したい」という学生①や「海外の研究を見てみたい」という学生⑨のように、国際的視野での研究職を希望する学生がいる。また、アジアの国々での企業研修があることが現在の就職先に決定する一つのきめてであったと語った学生②や、「就職先で海外に行く機会があればぜひ挑戦したい」と述べた学生③のように、海外出張や海外駐在の可能性のある企業への就職を希望して進路を決定した学生もいる。さらに、学生④⑨にみられるように、日本語教師に関心を強めた学生もいる。このように、職業は多様であるが、共通しているのは、将来の仕事や人生設計において、日本国内にとどまらず、世界が視野に入っているという点である。

中学時代の海外研修体験と国際的なキャリア設計の関連の強さについてはさらなる調査が必要だが、「(もし海外研修に参加していなければ) もともと内向的な人間なので、海外って聞いただけで萎縮してしまっていた」と語った学生①（現在は海外での研究活動を視野に入れている）や、駐在員として海外で仕事をしたいと思うに至ったのは「(中学時代の海外研修による影響が)、絶対にあった」と話した学生②や、「海外で活躍したいとか、日本と海外をつなげる仕事がしたいなっていう…要素がきちんと確立されたのは、アメリカに行ってなかったらなかったんじゃなかったのかなって思いますね」と語った学生⑥のように、中学時代の海外体験は、海外を視野に入れたキャリア構築を志向する、直接的あるいは間接的な契機となる傾向がみられた。

4．5．課題

〈阻害要因〉

〈阻害要因〉の定義は、「中学生時代に海外派遣を経験する際、およびその後海外研修に参加することを希望した際、参加を思いとどまらせる要因」であり、英語力不足、情報の欠如、参加費負担、という三つの要素が浮かび上がった。これらの阻害要因は、大学生にとっての海外研修や留学への阻害要因である、海外留学への奨学金の少なさや外国語力の不足（太田 2013）と共通する一方、中学生においては海外研修の情報入手方法がより受動的かつ偶発的である点が特徴的である。

英語力に関しては、聞き取り調査から、参加当初から不安を抱いていた学生が多いことがわかった。周囲の学生には「英語だからやめとくって言う子が多い(学生①)」という発言から示されるように、英語力不足が潜在的な阻害要因になっている。

情報については、校内に掲示すれば情報が生徒にいきわたるわけではなく、より踏み込んだ、背中を押すような個別の働きかけが重要である。中学時代に、海外研修への参加に乗り気ではなく、「一度参加を断った」ものの、教員の強い勧めで参加することに決めた（そして、その後何度も海外研修に参加するに至り、海外の研究施設への就職も視野に入れるようになった)学生①にみられるように、当初消極的であっても、より詳しい情報提供や奨励などによって態度が変化することがある。また、両親が海外出張や学生時代の留学経験を楽しく話して聞かせてくれたことが背中を押したと語った学生⑥や、兄の肯定的な海外研修体験に触発されたという学生⑨のように、家族や教員といった身近な人からの体験談や後押しが、海外研修情報に有効にアクセスさせる力を持つ。

さらに、最も教育費がかかるこの年代において、参加費負担は、研修への参加を思いとどまらせるだけでなく、情報収集をも躊躇させうる致命的な阻害要因となっている。学生②は、弟や妹にかかる教育費を慮って海外研修への参加を躊躇し、「これからはまあ行きたいくらいにとどめておく」、と意図的に参加意欲を抑えている心情を語った。そのほか、市の経費助成を伝え両親の許可を得た(学生④、⑪）実例に見られるように、市町村による経費助成により参加が可能となった例が多い。「日本の家計の悪化」が大学生の海外留学の阻害要因であるとの指摘（太田 2013）は、中学生にもあてはまる。社会のグローバル化にともない、今後海外研修の低学年齢化が進むであろうことを鑑みると、各家庭の財政状況が海外研修参加という教育機会の格差につながり、グローバル人材に求められるスキルの獲得機会や視野や職業観の拡大機会にも格差が及ぶことが危惧される。そのため、参加費の補助につながる助成金が大きな意味を持つと言える。

また、市町村主体の海外派遣に参加できる中学生の数は限られており、各校1～2名が学校枠として割り振られることが多い。これは、大半の中学生にとっては市町村主体の海外研修に参加できるチャンスが低いことを意味する。選抜方法については、限られた定員枠に対し、スピーチコンテストや作文、面接などの公

募制度により選抜する場合もある一方で、伝統的に生徒会役員を選出している中学校もある（平井、阿部、尾中 2016）。公平性担保の観点から学校枠を維持する意義を理解しつつも、意欲のある生徒に広く参加の機会を提供するために、学校枠と公募枠の併用選抜制度が望まれる。

5．結論

中学時代の海外研修体験の分析・評価研究がこれまで多くなく、短期研修に関しては英語力の向上のみが注目されてきた傾向が否めないが、本研究により、中学生時代の海外研修体験によって生じた中学生の意識変化は、継続的な行動変化を促し、その後の海外研修参加や世界を視野に入れたキャリア設計への下支えや原動力となっていることが示された。グローバルな視野やスキルを身に付けるという人材育成において、受験対応が最優先課題となる前の中学生という低学齢期に海外研修の機会を設ける意義は大きい。一方で、英語力不足、情報の欠如、参加費負担が参加を阻む要因であることが示された。

現在、大学生の「内向き志向」（グローバル人材育成推進会議 2011）が問題視されている。このような問題を解決すべく、高等教育機関でもグローバル人材育成を目標に様々な海外研修の機会を提供している（小林 2011）。しかし、大学での交換留学等への参加には、研修先での単位取得を勘案すると英語力が高いハードルになるケースが多い。また、就職活動との日程に関連しても、留学のタイミングの見極めが難しい。奨学金が得られず、留学にかかる費用をアルバイトなどの独自調達に頼る場合は、中長期的な計画が必要ともなる。これらの影響を最小限にするためには、大学入学前の早い段階で海外研修を体験し、海外に視野を向ける機会を創出し、海外留学へのモチベーションを醸成することが重要である。

助成金等により参加費が軽減された形で、英語力にかかわらず参加できる市町村の海外派遣事業は、中長期的なグローバル人材育成のための基礎的投資として大きな意味を持つ。今後、より多くの子どもたちが、家計状況によらず、参加の機会を持てるよう、中学生対象の海外研修派遣事業が継続し、拡充されることが望まれる。

〈謝辞〉

本研究は文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（拠点型）岩手大学共同研究支援研究経費により実施された。本研究の遂行にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

【注】

1）木下（2003, p.125）によると、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは、研究テーマに照らして理論的、現実的判断で選択された対象者について、最初に収集された「ベース・データ」に対して分析を行う。「だいたいの目途としては10例から20例位」の面接データがあればベース・データとなりうる。

【参考文献】

1）グローバル人材育成推進会議（2011）「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」。
2）日本学生支援機構（2019）「平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」。
3）新見有紀子（2018）「留学のインパクトに関する国内外の研究概要」横田雅弘、太田浩、新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定』学文社。
4）横田雅弘、太田浩、新見有紀子編（2018）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定』学文社。
5）文部科学省（2005）「初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～」。
6）門真市（2019）「中学生海外派遣事業」http://www.city.kadoma.osaka.jp/kyoiku/shogai_spo_tosho/gakushushien/kaigai_kenshu/index.html（2019年5月13日閲覧）
7）学校法人南山学園（2017）「事業報告書」https://www.nanzan.ac.jp/gakuen/jigyo2017.pdf（2019年6月28日閲覧）
8）函館市（2014）「中学生海外派遣事業」https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014031700264/（2019年5月13日閲覧）
9）東住吉区（2019）「～ゆめ応援プロジェクト～中学生海外派遣事業ニュージーランドから帰ってきました！」https://www.city.osaka.lg.jp/higashisumiyoshi/page/0000444303.html（2019年5月13日閲覧）
10）平井華代、阿部恵、尾中夏美（2016）「中学生対象の海外研修参加者に見られる教育的効果に関する研究:生徒の自己成長と意識変化を中心に」異文化間教育学会第38回大会発表抄録。
11）Hirai. H, Abe. M, Onaka N. (2018) “Impact on Attitudes of Junior High School Students after a Short-Term Study Abroad Program”. Asian Conference on Education and International Development, ACEID 2018 Programme and Abstract Book ISSN: 2433-7587 (Print), p36
12）木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂。
13）木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。

14）太田浩（2013）「第三章日本人学生の内向き志向再考」、横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社。
15）小林明（2011）「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」日本学生支援機構ウエブマガジン『留学交流』2011年5月号、Vol.2。

ABSTRACT

The Impact of Study Abroad Experiences of Junior High School Students on their Personalities and Life Courses

Hanayo Hirai
(Iwate University)
Megumi Abe
(National Institute of Technology [KOSEN], Hachinohe College)
Natsumi Onaka
(Iwate University)

<Keywords: study abroad/ junior high school students/ impact/ M-GTA>

It is increasingly recognized in studies conducted on university students that study abroad has a significant impact on students' intercultural and communication skills and self-awareness. However, assessment among younger students, such as junior high school students, is scarce, and thus little is known about the impact on them. Our previous study found that short-term study abroad programs have a significant positive impact on junior high school students in terms of fostering intercultural friendships, interest in foreign affairs, self-esteem, and positive attitudes toward new challenges. This paper aims to identify the long-term effects of the same programs on students' personality and life course after graduation from junior high school.

To observe these long-term effects, semi-structured interviews were conducted among nine university students and three technical college students who had participated in study abroad programs organized by city governments when they were in junior high school. Applying modified grounded theory approach (M-GTA) for interview analysis, the result showed that medium- and long-term positive impacts were observed. This was particularly evident in fostering self-confidence and intrinsic motivation, acquiring global awareness, the willingness to further participate in study abroad programs conducted in various countries during high school, university, and technical college periods, and

aspiring to obtain international careers which will allow them to visit various countries and interact with people from different cultural backgrounds. These findings suggest that study abroad programs for junior high school students have a long-lasting positive impact on the students.

As obstacles discouraging youth from participating in study abroad programs, insufficient English language skills, inability to access information, and cost were found to be major factors. Providing financial support is particularly important, as this is the critical reason for them giving up on participation or even searching for information about programs in the first place.

We conclude that it is important that junior high school students be given access to opportunities to participate in study abroad programs, and that financial support is crucial. These findings provide a new insight into understanding of the educational effect of study abroad programs for junior high school students.